

序：Preface

誰でもプレパラートを作り、地層から最初に化石珪藻を見出したとき、その美しさに感動し、次にこの珪藻の名前はなんだろうと好奇心を抱くと思う。私もその一人であったので、そのような折に参考になる本と思い、日本淡水化石珪藻図説を出版することにした。

日本の淡水生化石珪藻は、一般的に湖沼性堆積物から多く産出し、中心類が多産し羽状類は少ない。このため本書の掲載珪藻は珪藻類全体の割合からすると中心類が比較的多くなっており、化石として産出するが、現生種としても生育している羽状類珪藻の多くは割愛してある。本書を使用している珪藻の同定は、すでに現生種を収録した2種類の珪藻図鑑（渡辺ら 2005、小林ら 2006）が刊行されているので、それらを併用すると効果的と思われる。しかしながら本書にはそれらの図鑑に収録されていない現生種、化石種と混同しやすい現生種は収録したので、現生種の調査・研究にも役立つと考えている。

本書の作成にあたり、電子顕微鏡の使用、文献入手等のご援助をいただいた日本歯科大学教授南雲 保博士、同大学で電子顕微鏡観察の支援をしていただいた三橋扶佐子助教、松岡孝典博士、その他ご協力いただいた多くの方々、本書の出版を快く引き受けていただいた内田老鶴圃社長内田 学氏、編集にご尽力いただいた笠井千代樹編集長に深くお礼申し上げます。

2014年3月

田中 宏之

The beautiful shapes and varied structures of fossil diatoms from sediment never fail to make a strong impression on all who see them for the first time. It is then one may begin to take an interest in their names and what it is that distinguishes one from another. I have put this book together in order to share the fascination that I felt when I first saw the beauty of diatoms and made their study my life work.

This book mostly contains information on fossil freshwater diatoms found mainly in lacustrine deposits throughout Japan, but includes information on some recent diatoms as well. And, since centric diatoms tend to dominate these deposits, the focus is on relatively centric diatoms to the exclusion of many pennate diatoms. For more information on pennate and recent diatoms in Japan, please refer to two previous volumes: Watanabe *et al.* (2005) and Kobayasi *et al.* (2006).

I am grateful to Dr. Tamotsu Nagumo for his generous support as well as to assistant lecturer Ms. Fusako Mitsuhashi and Dr. Takanori Matsuoka for their kind assistance in SEM observations at The Nippon Dental University as well as the other collaborators including Manabu Uchida, president of Uchida Rokakuho Publishing, and Chiyoki Kasai, editor, for their help in editing and publishing this Atlas.

March, 2014

Hiroyuki Tanaka

凡例：Explanatory Notes

1. 本書は、日本の淡水成堆積物から見出された淡水生化石珪藻の図説である。一部に汽水種、および化石として産するが、化石からは適当な写真が得られなかった分類群を中心に、現生の淡水珪藻も収録してある（計 236 分類群）。
2. 掲載は分類群の写真を中心とし、短文の解説（和文）、図の説明（英文）を記した。
3. 分類群解説の文献欄には、原記載、または標記の所属に組み合わせを行った文献、あるいは殻の形態、種の特性等を理解する上で参考になると思われる入手しやすい文献を記した。
4. 末尾の引用文献欄には、各分類群解説における“ノート”、“産出”の項目で引用した文献を記してある。
5. 計測値は、特に記していない場合は、図に使用した産地の分類群のものである。
6. 産出報告における他の論文の引用は、図あるいは解説文で当該分類群であることが確認できたもののみを使用した。現生試料からの報告は、特に参考になると思われるものにとどめた。
7. 試料は前期中新世から完新世までの地層から採取したが、一部は現在の湖沼等から採取したものを含んでおり、産出欄等への記入は、現生の浮遊・付着性試料は現生（Recent）、底泥の場合は完新世（Holocene）と記した。
8. 命名者名は、文章中に使用する場合を除いて省略しないで記した。省略等の場合は、後藤（2003）で報告・提案されている略号等を使用した（たとえば原記載文の著者名が Skvortzow であっても Skvortsov とした）。
9. 用語は、Ross *et al.* (1979)、小林弘珪藻図鑑（小林ら 2006）で示されたものを基本的に使用した。おもな用語は図示した（pp. 35-36）。